

幼稚園児が「キレル」ケースがアメリカで多発している

「テキサス州のある幼稚園で、先生が6歳の女兒に『おもちゃを片付けましょう』と言ったところ、女兒はものすごいかんしゃくを起こして大声でわめき、椅子をひっくり返し、先生の机の下にもぐりこんで、ひきだしが飛び出すほどの勢いで机を蹴った。幼稚園児がこのように『キレル』ケースはここだけの例外ではない。テキサス州フォートワースの1学区だけでも、こうした報告が何件も挙がっている。『キレル』現象は、貧困層の児童だけでなく裕福な家庭の児童にも見られる。このように非常に幼い子供たちが『キレル』原因として両親が経済的理由から長時間の労働を強いられ、学校が終わってから何時間もデイケアに預けられたり一人ぼっちで過ごしたりする子供が多くなったこと、しかも、疲れはてて帰宅する両親はいらいらした精神状態で子供に接しがちなこと、などを指摘する説がある。あるいはアメリカでは2歳児の40%が1日に3時間以上もテレビを見ている、というデータを指摘する学者もいる。テレビを見ているあいだ、子供たちは生身の人間と接触して他人とのつきあい方を学ぶ機会を奪われている。テレビを見る時間が長ければ長いほど、学校で荒れる子供に育つ。」(SQ 生きかたの知能指数 ダニエル・ゴールマン著、土屋京子訳 日本経済新聞出版社)

日本で「キレル」若者たちが大きな社会問題となっているが、アメリカにおいても同様に、子供たちが「キレル」ケースが多発しているとの報告を読み、日本では若者たち、アメリカでは幼児という年齢差があるが、「キレル」という現象が、一人日本の問題でないこと、先進国共通の問題であることにあらためて気づく。

その原因を、テレビを長時間見ることに見出す見解にふれ、著者はフランスの研究者が2004年に世界72カ国、25億人対象に実施した調査では、世界でもっとも長時間見ている国が日本であり(1日4時間25分)、そして2位がアメリカであることを紹介している。さらにインターネットや電子メールも同様の影響を及ぼすと述べている。

人生でかわりあう人々から受ける作用によって気分だけでなく身体そのものが影響され形成される

1998年にEQ(心の知能指数)とリーダーシップに関する論文をハーバード・ビジネス・レビューに発表し一躍有名になったダニエル・ゴールマンは共同研究者リチャード・ボヤツィスとハーバード・ビジネス・レビュー(日本語版2009年2月号)に「EQを超えて:SQ(Social intelligence)リーダーシップ」と題する記事を寄せている。

EQの概念を発表して以降、社会神経科学の分野におけるめざましい研究成果があり、その成果に基づいて、SQ概念の開発に取り組んだとのことである。この記事を読んだ後、調べていくと、

ゴールマンの著作「SQ 生き方の知能指数」が2007年1月に出版されていることに気づき、早速購入した。幼稚園児が「キレル」ケースがアメリカで多発している話もこの本からの引用である。

社会的知性(Social intelligence=SQ)という言葉自体は心理学者ソ・ンダイクによって1920年によって提唱され始めた概念であり、「人々を理解し管理する能力であり、人間の世界でうまく生きていくために誰もが必要とするスキル」と定義されていた。この定義では人心操縦の一面を認める内容となっているが、ゴールマンは、他者を犠牲にして自分の利益を得る(人心操縦)能力は社会的知性に含めるべきでないと考え、「他者との関係において高い知性を発揮する能力」と再定義した。

さて、社会神経科学とは何かを理解するために「SQ 生きかたの知能指数」からの次の引用を参考にしてほしい。「社会神経科学は長いあいだなぞとされてきた点を解明しはじめている。不快な人間関係とストレス・ホルモンの関係が明らかになった。不快な人間関係が続くと、ウイルスと戦う免疫細胞をコントロールする遺伝子にダメージが発生する可能性があるという発見だ。」「経験がくりかえされることによってニューロンやシナプス結合の形状、大きさ、数が変化していく。長年にわたって日常生活を共にする相手からつねに傷つけられたり憤慨させられたりしていると、あるいは逆に満たされた気分を得ていると、それによって脳が変化していく可能性がある。」

これらの事実に基づき、ゴールマンは「人生でかわりあう人々から受ける作用によって気分だけでなく身体そのものが影響され形成されることを自覚して、賢明に行動しなければならない。また、逆に自分自身が他人の情動や健康にどのような影響を与えるかも、よく考えてみなければならない。」と説く。その意味から組織において、リーダーの役割がいかに大きいか分かる。サウスウエスト航空のCEOケレハーが社内外で笑顔を振りまき、社員や顧客を幸せな気分させているのは有名な話である。業績の高いリーダーが部下の笑いを引き出す回数は平均より3倍多いという調査もある。また「キレル」幼児、子供たちの問題は、家庭内における親たちの言動(対話、接触の欠如など)が何らかの形で影響していると推察できる。

編 | 集 | 後 | 記

SQに関する研究会で、ある人事部長が「自分の職業人生を振り返ると、残念ながら私が仕えたシニアマネジメントの多くは傾聴能力が弱くSQが低い人であった。」とつぶやいた。私たちの周りでもSQの低いリーダーは多くいます。社会神経科学の成果を使い、その人たちのSQを後天的にも高める方法、具体的な成功例の共有が出来ればよいと思っています。 野尻